

# スターリン論文と近代理論の反省

山田 雄三

## 1

スターリン論文<sup>1)</sup>について近代理論の立場から何か問題を提起せよというのが編集者の注文である。しかし科学の探求者としては、近代理論からも、マルクス主義経済学からも、学ぶべきものは学び、批判すべきものは批判するという以外に、正しい立場はあり得ない。いずれか一方のみを科学的として固執するほど、はっきり正邪が分けられるとは私には思えないし、それに近代理論といっても、細かい点ではいろいろと分裂もある。これまで私はいずれかといえば近代理論に多くの関心を寄せて来たが、しかし未解決のまま残されている問題も多いことを十分承知している。それで今度のスターリン論文に接しても、私はそこからいろいろな示唆を受け、従ってこれを近代理論の立場から批判するというよりも、むしろこれによって近代理論そのものに對する種々の反省を促されたというのが偽らない私の読みかたであった。たしかにこの點でスターリン論文は科学的に水準のきわめて高い貴重な経済学的文獻であると私は信じている。いま二三の論點について私の考えるところを述べ、これによって編集者の注文にお答えしたいと思う。

## 2

スターリン論文はまず経済法則の科学的なつかみ方から説き出している。それは次の如く述べられている。経済法則は、一般の科学的法則と同様、「人々の意志にかわりなくおこっている客観的な過程の反映」である。このことは、ソ連の場合に、その大きな成功に目がくらんで、経済法則を無視して、何でもできると考えるような態度を打破するためにも大切なことである、とも述べられている。人々は法則を認識し、それを社会のために利用することはできるが、新しい法則を勝手に作り出すことはできず、この點では経済の法則は自然の法則と同

じである。ただ経済の法則は、自然の法則と違って、その大部分が歴史的なものであり、従って古い法則は歴史的に新しい法則に席を譲らねばならない。しかしそれは古い法則が新しい経済的條件のために効力をうしない、その新しい経済的條件にもとずいて新しい法則が生れるためであって、新しい法則が勝手に作り出されるのではない。さらに経済の法則のいま一つの特徴として、新しい法則の発見と應用とは常に古い社会的勢力からきわめて激しい抵抗を受け、従って自然の法則のように多少ともすらすらと新しい法則の発見と應用とが行われるのと違って、古い勢力の抵抗に打ち勝つ勢力を必要とするのである。スターリン論文はこのように経済法則のつかみ方を規定している。

いうまでもなく、このような経済法則の客観性の理解、またこれに伴う歴史性と社会性との理解は、唯物史観にいう「物質的基礎」と呼ばれるものにもとづくのであろう。一切の観念化を排し、あくまで物質的基礎に徹しようとするのは唯物史観の特色であり、さらにそこにマルクス主義経済学がまさに科学的と呼ぶべき根拠が見られるのである。科学的方法とは一切の観念化を棄てて客観的法則を探求するものだからである。

ところで、マルクス経済学がその根柢に唯物史観の方法をもつに對し、近代理論の根柢には何があるか。

もちろん、近代理論といえば、それを直ちに資本主義擁護と結びつけて満足しているような皮相な見解は、とるにたらないであろう。近代理論もまた確固たる科学的方法の樹立を目指しているはずであって、模型とか假定とかいう論理的操作を精密にしていくのもその特色であろうし、また事實の檢證とか測定の根拠とかいう點できわめて鋭い究明を求めているのもそれであろう。このような近代理論の科学的方法は何と呼ぶべきか私自身はいわゆる「論理的實證主義」(ロジカル・ポジティヴィズム)のうちにその根拠をもっていると思っている。

しかし近代理論の多くの學者たちは(少數の例外を除いて)、このような方法論的基礎にあまり深い関心を寄せていない。唯物史観と論理的實證主義との對決もあまり問題にされていない。これは大いに反省すべき點であると思う。この場合、兩者の對決を考えると、私はかつてレーニンがマッハ主義に對して加えた反駁を

1) ここでテキストとしたのは新時代社版『イ・ヴェ・スターリン、ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』昭和27年12月刊である。これに併せて、英文で、J. Stalin: Economic Problems of Socialism in the U. S. S. R., Foreign Languages Publishing House, Moscow 1952を参照した。

無視しているのではない。たしかに今日の論理的實證主義はマッハ主義の系統を引いている。しかし問題はもっと深く再検討されねばならない。等しく觀念化を排し、等しく客觀的法則を求めながら、そこに微妙な對立がある。唯物史觀の方法は相對主義や不可知論にまつわる觀念化を鋭く排撃している。論理的實證主義の方法は絕對主義や獨斷論にまつわる觀念化を強く回避しようとしている。われわれはこれらのいずれの觀念化をも斥けなければならない。そうしてかかる觀點から唯物史觀と論理的實證主義との間に横たわる差異をもっと縮めていかなければならないと思う。私はスターリン論文を讀んでこのことをとくに痛感せしめられた。

## 3

經濟法則をとりあげられる場合、今度のスターリン論文においてとくに注目すべき點は、そこでは「社會主義制度のもとにおける經濟法則」の解明が中心をなしていることである。なぜそれは注目すべきことか。かつてのマルクス主義經濟學では、むしろ資本主義生産の諸法則が中心をなし、社會主義における諸法則は時折り斷片的に觸れられているに過ぎなかった。ここで資本主義の諸法則とは資本主義の崩壊の法則である。これに對し社會主義の諸法則とは社會主義の建設の法則として展開される。前者はいわば病理學的觀點から、後者はむしろ治療學的觀點からとりあげられる法則である。スターリン論文は社會主義制度のもとにおける建設的な經濟運用の法則を中心の課題とする點において、古いマルクス主義經濟學の文獻と區別されるのである。

價值法則についてスターリン論文では次の如く述べられている。價值法則は、社會主義のもとにおいても、一定の限界内——商品生産のある限り——で、妥當するものと認められる。それは、ソ連の現在の條件のもとで、經濟關係者たちに、生産を合理的に運営する精神を教える。ただ價值法則は國民經濟全體の生産の規制者ではない。價值法則の作用する範圍は、ソ連では、生産手段の社會的所有によって、また國民經濟の計畫的發展の作用によって、制限されている。スターリン論文は價值法則についてこのように述べている。

この問題はソ連でも久しく論ぜられて來たところであり、また近代理論の側でもすでに「經濟計算論」という題目の下に多くの文獻が現われていたものであるが、これらに對しスターリン論文はきわめて明確な解答を提供しているといえる。即ち、社會主義のもとにおいて價值法則の妥當を許しながら、それが物動計畫の如きものによって制限されることを認めたことは、その大きな業績

である。この場合に多少疑問がないではない。價值法則の内容を果たして労働價值説と解すべきかどうか。また國民經濟の計畫的發展における評價基準を如何に解すべきか。さらに商品流通を離れても計算の必要はないか。これらの點は暫くおくとして、私自身は前から、例えばランゲ流の價值又は價格中心の議論はそのままでは承認し難いと考えており、この點ではたしかにスターリン論文から種々明快な解答を得たと思っている。

これと関連して、もっと一般的に注意しなければならぬ點は、以上の議論のうちでいわば「機能(手段性)の認識」ともいふべきものが求められていることである。近代理論では、資本主義を通じて、もともと價格や貨幣や資本などについて機能の認識が求められていた。ところで、前述の如く、スターリン論文においては、價值法則の作用が例えば合理的運營の精神を教えるものと説明されている。また別の例だが、再生産方式についても、論文のあとの部分に、それが「資本的社會構成體以外のものに通用する基本内容」をもつものであることが力説されている。それらは明らかに機能の認識である。私はこの段階においてマルクス主義經濟學と近代理論との明白な接近を認めざるを得ない。尤も近代理論は資本主義を通じて機能の認識を求めた。しかしこれもマルクス主義の立場から非難さるべきではない。現にマルクスやエンゲルスの論文のうちにもかかる認識の斷片が含まれていたのだから。ただ問題は機能の認識のために資本主義そのものを直ちに調和的に解してはならぬという點にある。今日の近代理論も決してそのような單純な誤りは冒していないが、この點においてマルクス主義經濟學はきわめて鋭い洞察をもっていた。しかしいづれにせよ、機能とその實現條件との認識が經濟學の重要な課題であることを、われわれはスターリン論文から改めて確認せしめられることを、ここで強調しておきたい。

## 4

次に注目すべき點は、スターリン論文では、(1)「資本主義の基本的經濟法則」と(2)「社會主義の基本的經濟法則」とを明確に分けていることである。(1)資本主義の基本法則とは次の如く定式化される——「その國の住民の大部分を搾取し、零落させ、貧困化させることによって、他國とくに後進國の人民を奴隸化し、系統的に掠奪することによって、最後に、できるだけ多くの利潤を確保するために利用される戦争と國民經濟の軍事化とによって、最大限の資本主義的利潤を確保することである」と。(2)社會主義の基本法則とに次の如く定式化される——「全社會のたえず増大していく物質的および文

化的必要を、高度の技術に立脚する社會主義的生産のたえまない増進と改善とによって、最大限に定足するように保障することである」と。

ここでは一切の中間を許さざる二元論が打ち立てられている。一方は破壊であり、他方は建設である。一方は悪であり、他方は善である。これら二つの基本法則によって他のすべての經濟諸法則も仕分けされる。即ち、等しく價值法則といつても、資本主義のもとでは破壊的意義をもち、社會主義のもとでは建設的意義をもつ。等しく再生産方式といつても、資本主義のもとでは破壊的意義をもち、社會主義のもとでは建設的意義をもつ。二つの基本法則を上述の如く承認する限り、それは當然である。

ここに基本法則と呼ばれるものはむしろ目的ないし力の問題であるともいえよう。そうして、手段に對する目的、機能に對する力をつかむこと、それは現實經濟の洞察にとってきわめて重要なことである。マルクス主義經濟學が迫力をもっているのはかかる力の問題を鋭く理解しているからである。近代理論はこの點においていかにも弱い。獨占の理論や不完全競争の理論においてたしかに力の問題はとりあげられているが、階級や國家の問題をもっと鋭くつかまねばならないであろう。オイケンの如く、稜角を削り落とすものは經濟を理解し得ないのである。

ところでスターリン論文における二つの基本法則は、資本主義と社會主義との對立を、破壊力と建設力との對立と全くトートロジカルなものとして解している。恐らくこのことはマルキシズムの根本的態度であろう。これを承認するか否かによってマルキシズムと然らざるものとが分かれるといつても過言ではなからう。私自身はかかる二元論に満足できないでいる。もちろん私はソ連經濟の現實における輝かしい發展に目を蔽うものではない。それはたしかにここにいう社會主義目的に向つての眞劍な努力によるであろう。しかし強力な支配力を離れてはこのことは成り立たないし、同時に強力な支配力は必ず建設的であるという保證はない。翻つて資本主義の現實を見る。ここでは私有財産と利潤追求のもとにたしかに醜い力の角逐が行われている。しかしこれに對する様々な修正の努力も現實的な力となっているし、さらに一般に力の角逐が必ず破壊的であるとも斷じ得ない。かくて現實は二元論で割り切れるものではなく、資本主義における計畫化の如きも十分現實性をもっている。それはソ連における如く強力には運び得ないであろう。しかし強力な計畫のみが計畫ではない。またいずれかが絶対に正しいというものでもない。いずれも經濟的條件に應じてそ

れぞれの性格において規定されなければならないのである。

## 5

最後に、スターリン論文からここで私のとりあげたいいま一つの論點は、「資本主義諸國間の戦争の不可避性」という問題である。畢竟それは上述の資本主義基本法則のうち根拠づけられるのであるが、その趣旨はおよそ次の如くである。第二次世界大戦は、ソ同盟との戦争からではなく、資本主義諸國間の戦争から始つた。なぜか。それはソ同盟との戦争は資本主義そのものの存亡にかかわるからであり、また指導者たちは心のうちでソ同盟の侵略を信じないからである。かくて資本主義と社會主義との間の矛盾はたしかに激しいのかかわらず、それよりも資本主義諸國間の市場獲得競争と競争相手を破滅させようとする熱望の方が一層激しいのである。さらに現在の平和運動は平和を守り新しい世界大戦を防ぐための競争に大衆を立ちあがらせているが、このことは、それが社會主義のための競争でない限り、戦争を一時延期せしめることはあつても、これを根絶せしめるものではない。これがスターリン論文で述べているところである。

しかしソ連との戦争が資本主義そのものの存亡にかかわると全く同様に、資本主義諸國間の戦争もまた資本主義の存亡にかかわることはないか。もしソ連との戦争がソ連が強力なるために避けられるものとすれば、それは軍備の對抗を意味するのではないか。戦争の根絶は資本主義を排止することによつてのみ可能だとすると、資本主義の破滅のための競争に大衆をかり立てる運動が展開されるであろうが、この運動に對して資本主義は抗争することになり、延いて資本主義國と社會主義國との戦争を惹き起すことはないか。それは直ちにソ連との戦争ではないとしても、ソ連をバックとする内亂や紛争の起る可能性は大分考えられるのではないか。スターリン論文のこの部分については私は以上のような種々の疑問をもつ。根本の問題はここでも二元論で割り切ることが正しいかどうかであろう。二元論はたしかに簡單にして迫力をもつ。しかし理論的に將來の豫想を行う場合にも、資本主義内部において戦争や恐慌を避けようとする努力を看過することはそれだけ歪みを生ずるであろう。このような疑問はあるが、しかし力の角逐を正確につかんで客觀的に將來の動きを明らかにすることは、たしかに社會科學の窮局な課題である。論理的實證主義の立場に立つて、近代理論もこのような方面の研究をもっと積極的に展開すべきであり、それによつてスターリン論文に提出されている問題に焦點を合わせる必要があると私は考えている。